

品川の学童疎開——戦時下の子どもたち

戦争の激化に伴い、昭和19年6月、政府は都市防衛の強化と学童身命の防護を目的に、学童集団疎開を決定した。東京都区部をはじめ13の都市が指定され(のち17都市)、都の集団疎开学童数は、約23万7千人といわれている。対象となったのは、国民学校初等科3年以上6年までの縁故のない学童で保護者からの申請によって行われた(翌年3月、低学年も対象に)。学童は教師や寮母などに守られながら、それぞれの学校ごとに指定された疎開地で寺院や神社、集会所、旅館などを宿舎とし、一年数か月にわたる耐乏生活を続けた。生活費は1人1か月20円以内とされ、保護者は生活費の一部として月10円負担した。

終戦により疎开学童の復帰が行われたが、全校が完了するまでに数か月を要した。以下は、当時の資料や記録をもとに、品川区の学童集団疎開の経過を概観したものである。



▲ 疎開児童の絵画 (立会国民学校6年)

学童集団疎開一年 表一

※地名は疎開当時のもので表記した。

昭和19年 (1944)

- 6月30日 学童疎開、閣議決定。
- 7月16日 国民学校長会議で都長官訓示。
- 18日～ 各国民学校は保護者会を開催。集団疎開計画を通知し、参加を勧奨。
- 20日～ 疎開地の实地踏査。
- 8月4日 帝都学童集団疎開の第一陣として、品川区城南第二国民学校が西多摩郡瑞穂町へ出発。
- 14日～19日 引き続き、区内国民学校の学童疎開始まる。八王子市、西・南多摩郡に、20校約6,500名が出発。
- 21日～28日 荏原区内国民学校の学童疎開始まる。静岡県に11校・約4,000名、富山県に5校・約1,500名が出発。
- 12月7日 東南海地震が発生し多数の死者が出たが、静岡県内の学寮の被害は軽微であった。



▲ 小山国民学校の疎開先 静岡県伊東町での集合写真

昭和20年（1945）

- 1月18日 皇后陛下より疎開学童にお菓子を賜わる。
- 2月25日～ 集団疎開学童のうち6年学童、卒業のため帰校。
- 3月～4月 品川、荏原両区の1、2年学童も対象とした第二次集団疎開始まる。荏原区の学童は、富山県に集団疎開を実施。
- 5月25日 東京にB29の大空襲、南多摩郡の妙延寺学寮（伊藤国民学校）・万松寺寮（鈴ヶ森国民学校）・宝蔵院学寮（山中国民学校）が全焼。学童は全員無事。
- 6月1日～12日 静岡県に疎開した荏原区11校の学童は戦禍を避け、青森県に再疎開を実施。
- 7月6日 八王子空襲により円通寺学寮（鮫浜国民学校）が全焼。疎開学童は全員無事。
- 7月8日 八王子空襲で原国民学校4年の学童がアメリカ軍の戦闘機P51の銃弾を受け死亡。
- 27日 午後2時頃、第一日野国民学校5年の学童が八王子方面から来た戦闘機の機銃掃射を受け翌日死亡。
- 8月2日 八王子大空襲で、宇津木学寮（大井第一国民学校）・大林寺学寮（立会国民学校）・宝生寺学寮（原国民学校）・乾晨寺学寮（鮫浜国民学校）・妙経寺学寮（浜川国民学校）が全焼。また観栖寺学寮（原国民学校）にも焼夷弾が4か所に落下。学童は避難し全員無事。
- 9月26日 疎開学童復帰の文部省通達。
- 30日～ 学童つぎつぎと疎開地から引揚げ。
- 12月13日 復帰学童歓迎学芸会開催。派遣職員に対し、都長官の感謝の言葉を伝達。



▲ 富山に疎開した大間窪国民学校学童



▲ 静岡県から青森県大鰐に再疎開した宮前国民学校の学童たち（撮影：中村立行）

▼ 空襲の犠牲になった原国民学校学童を供養したランドセル地蔵（相即寺 八王子）

